

第27号

札幌くらぶ

発行／札幌くらぶ
 (財)札幌交響楽団内
 札幌市中央区中島公園1番15号
 (札幌コンサートホール内)
 電話 011-520-1771
 F A X 011-520-1772

第6回札幌くらぶコンサート開催

会員先行予約は20日必着

●コンサートの概要

コンサートは4月17日(土)、札幌コンサートホール・キタラ大ホールで、午後4時30分開場、午後5時開演の日程で行われます。

指揮とお話は、昨年に続き、西本智実さんで、プログラムはドビュッシー(ビュッセル編曲)／小組曲、チャイコフスキー／交響曲第4番です。

毎回好評の「指揮者にチャレンジ」のコーナーももちろん行われます。どんな曲になるかは、当日プログラムを見るまでの楽しみにして下さい。

皆さんの熱気によってはアンコールもあるかもしれません。指揮者や楽員さんがその気になるよう、熱烈な拍手をお願いします。

●開催方式変更

昨年までと開催方式が変わりました。昨年までは、札幌交響楽団の協力をいただき、札幌くらぶ単独で企画・運営をしてまいりましたが、今年からは札幌交響楽団の自主公演と位置づけ、札幌くらぶが共催者として協力する方式になりました。

理由はいくつかありますが、その主な点は、札幌の財政再建のため、少しでも役立つ形を求め、文化庁からの助成を受けるなどのメリットを生かす、また、札幌のチケット販売方式が変わり、先行予約以外は従来のように札幌くらぶ手売りのような販売法

を取ることが不可能になったことです。

お客様にとっては大きな変化とは感じられないかもしれませんが、会員の皆様にはご理解をいただきますようご報告申し上げます。

●チケット価格が変わりました

前述の通り、札幌の財政支援に直接役立つよう、また、他の札幌の自主公演とのバランスを考慮し、一般券を500円値上げし、3000円にさせていただくことになりました。

これにつきましても、ぎりぎりやむを得ない選択でございまして、会員の皆様のご理解を賜りますようお願い申し上げます。

●会員先行予約

すでにご案内を差し上げて、2月2日からハガキによる受け付けが始まっています。昨年までと違い、申込みは2月20日必着分まで、それ以降は受け付け出

来ません。以後はすべてプレイガイドでご購入いただくことになります。札幌事務所でもご購入はできませんので、お忘れなく20日必着でお申込み下さい。

●昨年同様キタラを満席に

皆様のご協力で、キタラを満席にしましょう。友人・知人の方々に声かけをお願いいたします。



昨年のコンサートでの西本智実さん

コンマスに聞く

札幌交響楽団

コンサートマスター

かの
菅野 まゆみ さん

音楽で人々に
感動を伝えられれば!!



菅野まゆみさんのプロフィール

仙台市出身。東京芸術大学附属高等学校卒業。同大学入学3カ月後にアメリカのサンフランシスコ音楽院に招待留学。在学中、コールマン・ナショナル室内楽コンクール第1位。また、タングルウッドのバークシャー音楽祭では最優秀ヴァイオリニストとして、シルバースタイン賞を受賞する。卒業後、同音楽院講師、スタンフォード大学講師を務め、スタンフォード弦楽四重奏団、後にフィラデルフィア弦楽四重奏団の第1ヴァイオリニストとして全米、メキシコ、ヨーロッパで演奏。その後、シラキュース・シンフォニー・オーケストラのアソシエイト・コンサートマスター、ヴァンクーバー・シンフォニーの首席第2ヴァイオリン、東京交響楽団のアシスタント・コンサートマスターを務めた後、ゲスト・コンサートマスターとして読売日本交響楽団をはじめ数多くのオーケストラと協演。1995年にはジュネーブでの国際連合50周年記念オーケストラ（ショルティ指揮）に日本代表で参加した。1998年より札幌交響楽団のコンサートマスターを務めている。

1月14日、全道が猛吹雪となった日、キタラで菅野さんにお話を伺いました。思っていたよりずっと気さくな方で、予定時間をオーバーして話が弾みました。

— 札幌には菅野さんを含め、5人も仙台出身者がいますが、仙台には特別な音楽風土があるのでしょうか。

菅野 さあどうでしょう。今は仙台フィルがありますが、昔はそんなに音楽の盛んな土地でもなく、私の小さい時には才能教育の音楽教室しかなかったと思います。

— では、ヴァイオリンはその音楽教室からですか。

菅野 ええ、隣の2つ年上のお姉ちゃんがヴァイオリンをやっていて、時々お庭に忍び込んでヴァイオリンを聴いて、ああやりたいなと思ったのが4歳の時です。レッスンを受けるといよりは、皆さんと一緒に遊びをするという感じでしたが、そこに通い始めました。

— 本格的に習い始めたのは。

菅野 習い始めてから半年後くらいに、父の仕事の関係でアメリカに行きました。で、その時に初めて専門の先生に習いました。その後2年間で仙台に戻り、また才能教育で、小学校卒業までずっとやってきました。

中学校1年生の時から、東京芸大の附属高校の校長先生が父の教え子のお父様という関係で、月に1回一人で東京に行って習い始めました。そんなことで高校は芸大の附属になりました。

— その頃には、将来はプロにと思っていたのですか。

菅野 いいえ。小学校の頃にはピアノも習っていましたが、どちらかというとピアノの方が好きだったんです。でも、サッカーのゴールキーパーをやっている右手の小指を骨折してしまい、ヴァイオリンをやるしかないなんて思ったくらいですから。父は化学者ですので、私にもかたい職業についてもraitなく、芸高に進学する時にも、音大にも行くかもしれないけど卒業したら普通の大学で学び直すからという約束でした。

高校の卒業演奏で、バッハのシャコンヌを演奏した時に、「ああ、私はヴァイオリンが好きなんだ」と、その時初めて演奏家になろうと思いました。

— 芸大に入ってすぐアメリカに留学されましたね。

菅野 実は、芸大に入ってからは、私は自由にのびのびと音楽をやりたいという夢を持って入学したのに、この大学は向いていないのではないかと疑問を持ち始めていたのです。そんな

時に、5月か6月だったと思いますが、サンフランシスコ音楽院の校長先生が日本に来てオーディションをするから受けてみては、と私の先生に勧められたのです。受けましたらその場で、奨学金で生活費も出してやるから8月からお出でなさいということになって、私は父親の了解をとるため、当時の夜行列車で慌てて仙台に帰り、説得しました。以前アメリカには住んでいたこともあり、父も許してくれました。当時、芸大から留学される方はほとんどヨーロッパで、アメリカというのは珍しかったと思います。

—— アメリカの生活はいかがでしたか。

菅野 アメリカでは、大学がスポンサーになってカルテットをやるのですが、私はスタンフォード大学で、年に6回くらいコンサートをやり、その合間に学生に教えるという生活をしていました。その後、別のカルテットに移りましたが、オーケストラにも参加していました。

ある音楽祭のオケにコンマスで招かれた時に、メンバーの皆さんはベテランばかりでしたが、私はまだ20台で理想も高く、ボウイングなんかでこうやりたいなんて主張して、それだけでなく日本人は若く見られますから、「小娘が何言ってるんだ」と、向こうの人ははっきり言いますから、こっぴどくやられたことがあります。でも、そんな経験をして自分でも随分強くなったと思います。

—— さて、札幌入団のいきさつをお話いただけますか。

菅野 1年くらいだと思いますが、結構長い間ゲスト・コンマスで来させていただきました。その頃はフリーであちこちのオケにゲストで行っていたのですが、読響に多く行ってまして、尾高さんがちょうど指揮者でいらっしやあって、尾高さんが札幌に行かれるという時にコンマスでどうかというお話があり、入団することになりました。

—— 札幌をどんなオケと見ていましたか。

菅野 すごく真面目なオケだと思いました。地方によく行くのですけれど、全く手を抜くことなく、皆さん一生懸命演奏なさるといい印象を持っていました。

—— 北海道での生活には抵抗はありませんでしたか。

菅野 全然ありませんでした。というより、懐かしい感じがしました。今でこそ仙台はあまり雪が降りませんが、私が子どもの頃には結構たくさん降りましたから、北海道の気候にも違和感はありませんでした。

—— コンマスとしての大変さとか、心がけてお

られることはありましょうか。

菅野 大変さを自覚しないで入って、この頃その重大さに気づいたというところですか。入った頃はコンマスといえども皆と同じメンバーの一人、皆と同じ音を弾き、皆と同じにやっついこうという意識でした。だから、普通コンマスは皆が着席した後一人で出てきたりしますが、私は皆と一緒に出るようにしました。また、終了後感謝を込めて礼をするのも、私が最初だと思います。とにかく皆と一緒にやっているということが私にとっては大切なこ



とだったと思います。でも、今はそれだけではだめだなと思っています。メンバーの皆をまとめていかなければならないことや、専務理事の佐藤さんにもよく言われるのですが、札幌の顔としていろいろなところに積極的に出ていかなければいけない、そして道民、札幌市民の皆様に札幌を身近なものと感じて頂かなければならない。そういう、自分の立場の責任の重大性を今感じています。

—— 今後、札幌はどんなオーケストラに、とお考えですか。

菅野 例えば東京のオケとの比較というようなことではなく、札幌独自の音、音楽、それがどういうものか私にも今はよく分らないのですが、「あ、これ札幌の音だ」と分ってもらえるようなオーケストラになればと思っています。

—— 最後に、将来への夢をお聞かせ下さい。

菅野 一つは、百歳までヴァイオリンを弾きたいと思っています。バッハの無伴奏ソナタが6曲ありますけれど、どんどんつきつめて行って、百歳で何とか自分のものにできればと思います。二つには、病院に行ったり、震災後の神戸の子ども達の前で演奏したりという体験から、音楽で人に感動を伝えることが出来ればいいなと思っています。

(田山登代美、佐藤紀子、佐藤良次)

札幌の 現状と 将来

財政危機が報じられる中、財団法人札幌交響楽団専務理事に就任して間もなく1年、日夜札幌再生に努めておられる佐藤光明さんに、札幌の現状と将来について簡潔にご報告をいただきました。

なお、詳細な財務状況などにつきましては、札幌のホームページで情報公開されています。

「あたりまえのことを…」

財団法人札幌交響楽団専務理事 佐藤 光明

「もうギブアップ！」——。昨年3月、札幌交響楽団専務理事就任後の数ヶ月間、幾度、頭を抱えたか知れない。端的に言えば、札幌交響楽団は「無秩序状態」でした。今年度、赤字を出せば財政破綻—解散にもかかわらず、財務、営業、企画運営の三部門とも全く機能を果たしていない。その一方で、理事会からは一挙に、今年度の収支均衡を厳命されている。まさにお先真っ暗でした。

あれから10ヶ月、いま、札幌交響楽団は、大きく変わりつつあります。財務では、昨年度1億1千万円もの大幅赤字を出していたのが、一挙に収支均衡以上の成果を見せています。楽員も、「道民との触れあい」を合い言葉に、どこでも演奏に出かけます。事務局も一新、増強されました。もう、一年前の札幌交響楽団はありません。



最近「どうして、そんなに変われるの」とよく聞かれます。答は、簡単です。「当たり前のことを当たり前に進める」に尽きます。実は、不調の原因は、原則を無視、忘れた結果ということが多いのです。札幌交響楽団もそうでした。

しかし、札幌交響楽団の本当の改革はこれからです。その最大の課題は、オーケストラの質の向上です。組織、体制をいくら変えても、札幌交響楽団の演奏が劣れば、努力が無為に帰します。おそらく、こんな呼

びかけは過去10数年なかったと思います。「これからの札幌交響楽団は、音と質の向上に全力を挙げる」と。

今、楽員は燃えています。楽員、ユニオン、理事会、事務局一体となった再建運動の先に明るい展望が見えてきたからです。その機軸になっているのが、「すばらしい演奏を」です。

from 「札幌くらぶ」

札幌東京公演のツアーについて

今年度の総会におきまして、札幌の東京公演へのツアーを募りたいということを事業計画の一つに入れ、その実現性を探ってまいりましたが、残念ながら、一般に市販されているバックツアーよりも安値での実施は無理、札幌事務所で扱っているチケットが売れ行き好調でチケットの確保の見通しが立たないなどの事情により、今年度は行わないことになりました。今年、3月25日東京赤坂のサントリーホールで、尾高忠明指揮による、モーツァルト／交響曲第41番「ジュピター」、マーラー／交響曲第1番「巨人」が演奏されます。皆様、札幌事務所にお問い合わせの上、どうぞお聴きにお出かけ下さい。

札幌くらぶスタッフも6名が聴きに行く予定です。毎年みえるニキティンさんにお会いするのも楽しみです。その様子は次号以降にご報告いたします。

札幌で日本デビュー

～外国人指揮者編④～



札幌で日本デビューした指揮者が、すべてその実績が海外で認められて、世界の一流指揮者の仲間入りをした訳ではない。

1977年11月21日にカワイ音楽振興会が招聘したソ連のピアニスト、ウラジミール・フェルツマンの札幌公演と、24日の藤学園演奏会を指揮したジョージ・ヴァーヴィルトは、当時ベルギー国立放送交響楽団の指揮者を務めていて、21日のショパンの曲とチャイコフスキーのピアノ協奏曲の協演では、フェルツマンの絶大な信頼を得、藤学園でのファリャの「三角帽子」も素晴らしかった。当時既に中堅の指揮者だったにもかかわらず、その後の消息をあまり聞かない。この札幌公演終了後、私と3人で食事をした時の会話が直接のきっかけとなって、フェルツマンはその後アメリカへ亡命した。

1983年1月8日の北海道厚生年金会館ニューイヤー・オペラコンサートと、9日の恵庭市・札幌演奏会を指揮したアンドラーシュ・リゲティは、日本での馴染みは薄いですが、その後目覚ましい活躍をしている。

最初に名前を聞いた時、ピアニストのアンドラーシュ・シフと作曲家ジョルジュ・リゲティが頭の中で一緒になり、どちらかが指揮者に転向したのかと思った。

シフと同年のハンガリー生まれでヴァイオリン奏者、当時ハンガリー国立歌劇場管弦楽団のコンサートマスターから指揮者になったばかりだった。

札幌はちょうどコンサートマスターを探している時で、コンサートマスター候補に上がっていた1人だった。

指揮者として現われた30歳の好青年は、切れ味鋭い棒捌きで札幌をぐいぐい引っ張った。

北海道厚生年金会館ニューイヤー・オペラコンサートでは、ソプラノの清水まりとバリトンの勝部太がモーツァルト、ロッシニ、ヴェルディのオペラ・アリアを歌った。歌劇場のオーケストラのコンサートマスターを務めていただけに、2人ともとても歌いやすかった、と感想を述べ感謝していた。

その後コンサートマスターを務めていたハンガリー国立歌劇場の指揮者に就任し、マーラー・ユージェントO. ではクラウディオ・アバドのアシスタントを務めて高い評価を得、ハンガリー放送交響楽団の指揮者、首席指揮者を務め、ヨーロッパ・アメリカのオーケストラで大活躍をしている。札幌で日本デビューをした成功組の1人である。

(竹津宜男)

札幌 クイズ

さあ、あなたは正解が出せますか。

Q

2～3ページの菅野まゆみさんのインタビューの中で、仙台出身の楽員が5人いるということですが、では問題です。次の方で、仙台出身の方はどなたでしょうか。

- A、ヴァイオリンの河邊です。広瀬川の川面が目にかびます。
- B、ファゴットの一戸です。青葉城が恋しいです。
- C、オーボエの宮城です。僕の名前からして当然でしょう。
- D、オーボエの岩崎です。皆さんはご存知ですよええ。

正解された方に賞品はありません。「札幌くらぶ」11号をお持ちの方はすぐ分りますね。ただそれだけのクイズです。

PLAYER'S TALK

札幌交響楽団 コントラバス首席奏者

すけ がわ りゅう
助川 龍 さん

ご出身は

東京生まれの東京育ちです。

札幌の印象はいかがですか

去年の2月にオーディションがあったのですが、一昨年の11月にエキストラで来まして、ギターとか芸術の森とか、恵まれた自然の中で音楽ができるというのはいいなあと思いました。

クラシック音楽との出会いは

母が中学校の音楽教師でしたので、クラシック音楽にはずっと触れていましたが、小学校の頃は無理やりピアノを習わされているという感じで、全然興味はありませんでした。

コントラバスになったのは

中学生の頃にエレキベースをやるようになり、兄がギターをやっていた影響もあって、ロック少年みたいなことをやってました。その後、徐々にジャズが好きになって、高校の頃は将来はアメリカに行こうかなんて考えていて、本格的にジャズをやるために弓とセットになった安いウッドベースを買ったんです。弓で弾くのは初めてで、やってみただけ音がしないので、やっぱり弾くのは難しいから習わなければと思いました。それで、紹介された先生のところへいったら、弓に松脂をつけないと音が出ないということが分り、それからなんか面白くなって、その先生が国立音大の先生だったので、ちょうど進学の時でもあったので、そのまま国立音大に進学しました。それから、どんどんコントラバスが好きになりました。

札幌入団までは

国立に入ってから、今N響の首席でいらっしゃる池松先生に4年間習いました。先生にコントラバスの魅力を教えていただき、卒業後も桐朋の研究科で2年間習い、その後も個人的にレッスンを受けています。コントラバスはソロの楽器ではないので、い



つかはオーケストラに入りたいと思っていました。なかなかチャンスがなく、2年くらい東京でフリーで活動し、いろんなオーケストラのエキストラなんかをしていました。一昨年の11月に札幌のエキストラで来た時に、2月にオーディションがあることを知りました。たまたま、そのオーディションの前日の札幌のコンサートにもエキストラで出演することになってまして、これも何かの縁かと思い、札幌にも良い印象を持っていましたので、挑戦してみようかなと思って受けました。

入団してみていかがですか

まず、立場の違いを実感しています。エキストラでやっていた時は、一番後ろで、とにかく合わせて弾くということでしたが、今は、オーケストラとしてどんな音楽をやりたいのかということ、指揮者や他の首席奏者とコンタクトを取りながら示していかなければならないわけです。経験が少ない分それで苦労していますが、札幌の皆さんは非常によくサポートして下さいますので、有り難いですし、僕もそれに応えようという気持ちにさせられています。

趣味はお持ちですか

札幌に入って趣味が増えました。魚釣りは池松先生もお好きで、先生に習いましたが、入団してから溪流釣りや海にも行きましたし、副首席の飯田さんが釣り名人で、いろいろ教えていただきました。あとは、ビリヤードをビオラの物部さんに連れて行ってもらってやるようになりました。

将来への夢・希望は

とにかく池松先生がすごく好きで、海外へ行くことを考えなかったのも、一番習いたい先生がそこにいたからです。最初のレッスンですごい衝撃を受け

ました。コントラバスのイメージが変わったほどです。先生はソロの活動もされていますが、新しいスタイルに常にチャレンジしておられる姿勢に感銘を受けています。オケの中でも他の弦楽器奏者に高く評価されておられますし、僕もいつの日にか池松先生のような奏者になれたらと思っています。目下のところはそれが僕の夢です。

札幌交響楽団 クラリネット奏者

わたなべ だいざぶろう
渡部 大三郎 さん



クラリネットになったいきさつは

私は千歳生まれなんです。小さな頃に、米軍千歳基地向けのラジオ放送（極東ネットワーク）があって、それにベニー・グットマンのジャズ演奏などがよく流れていました。自然にクラリネットの音が入ったようです。友人の家は質屋さんで、アメリカ兵の質流れ品の中にクラリネットがありました。その友人と二人で、札幌NHK放送管弦楽団クラリネット奏者の川原清二さんの所へレッスンに通いました。後に、札幌の首席でいらっしゃった高鹿先生に学び、私は武蔵野音大に進学しました。

卒業してすぐ札幌に？

いえ、大学を出てから8年間くらいアメリカにいました。南ミシシッピ大学、インディアナ大学、ボストン大学で学びました。東京の学生時代はキャバレーのバンドで稼ぎ、アメリカではウエイターなんかをやりながら自活していました。

音楽で食べられるように、アメリカ、カナダなどのオーケストラに何度もチャレンジしたのですがすべて失敗し、失意のうちに1977年に帰国しました。その翌年に札幌オーディションで幸運にも受かり、33歳でプロの仲間入りをしました。札幌入団は最高に、最高に嬉しかったです。

後進の指導に熱心でいらっしゃいますね

札幌入団と同時期に北海道教育大学で、またその数年後には大谷短大でも教え始めました。教え子の中で上の人はいもう40過ぎになります。いろいろところで活躍しています。

教えるということは自分自身を客観的に見ることが出来ますので、学生から多くのことを学んだというのが実感です。私の音楽作りにはプラスになりました。

ところで 趣味は

パソコンですね。そんなに時間をかけているわけではなく、日に1時間程度でしょうか。最近も動きの速い新しいものを買いました。

将来への夢は

出会いがジャズでしたので、原点に戻りたいと、一昨年に2か月間ボストンのバークレー音楽院等で即興演奏を勉強してきました。それで、前半はクラシック、後半はジャズのようなコンサートをやってみたいと思っています。即興演奏の楽しさは、羽が生えたように動けるのが最高だと思います。

お休みの日は

オーケストラだけではなく室内楽も時々やっていますので、ほとんどその練習なんかで一日が終わることが多いです。場合によっては、リード選びだけで一日を費やすこともあります。年を取ってきますと、練習量でカバーしなければという面も出てきますし……。

札幌の将来については

昨年、財団の財政的な危機を迎え、我々演奏家に今まで何が欠けていたかを考えさせられました。この一年で、随分楽団員の姿勢も変わり、良い方向に向かっています。将来を担う若い楽団員達は、人間的にも協調性があり、音楽的レベルも高く本当に素晴らしいです。必ず明るい未来が来ます。

札幌くらぶに一言

本当に、支えていただき有り難いと思います。感謝の気持ちで一杯です。

(田山登代美 佐藤紀子 佐藤良次)

from 「札幌くらぶ」

初の「札幌ニューイヤーコンサート&交流会」開催

去る1月7日、ロイトン札幌で札幌主催の「札幌交響楽団ニューイヤーコンサート&交流会」が、定期会員、維持会員を対象に開催されました。これには、ご案内しましたように札幌くらぶ会員も特別に参加でき、数十名の会員が参加しました。

当日は約600人の参加があり、第1部演奏、第2部交流会で、年の初めにふさわしく盛会となりました。第1部では尾高、高関の札幌両指揮者により、J・シュトラウスのワルツや「フィンランディア」などが演奏され、特にラストの「ラデツキー行進曲」では、尾高さんがオーケストラを指揮し、高関さんが聴衆の手拍子を指揮するという珍しい趣向があり、更には途中から来賓の三浦雄一郎氏が指揮、尾高さんが打楽器、高関さんがヴァイオリンを演奏し割れんばかりの喝采を博しました。

第2部の交流会では、理事長や上田会長などの挨拶の後、鏡開きをして宴が始まりました。ほとんどの楽員さんも参加し、広い会場内を埋め尽くした人々が、楽しげに語り合う情景は圧倒されるものがありました。

当日会場で、尾高、高関の両氏、それに上田会長にこの企画についてのコメントをいただきましたのでご紹介します。

尾高さん「こんなにたくさんの方に集まっていたいただき、僕はいろんな催しに出ていますが、世界的にもこんなすごいのはないですね。さっきの三浦雄一郎先生にしても本当にありがたいですね。ますます頑張らなくては、という気持ちにさせられました」

高関さん「こんなにたくさんの方に集まっていただけでは思っていなかったので、本当に心強く思っています」

上田会長「札幌くらぶが夢に見ていたことが今実現出来て、これは札幌の再生のためには最高の企画だと思いますので、また来年も続けていただきたいと思います」



札幌くらぶのホーム・ページが出来ました

札幌くらぶスタッフの武藤義典さんのご尽力で、念願の札幌くらぶのホーム・ページが立ち上げられました。「札幌くらぶの歩み」や「札幌くらぶの活動」など、札幌くらぶのすべてが公開されていますので、是非ご利用下さい。

今後は、機関誌「札幌くらぶ」の掲載も考えています。まだ認知度が低く、アクセスも少ないということですので、会員の皆様のアクセスをお待ちいたしております。アドレスは次の通りです。

<http://www2.ocn.ne.jp/~muto/sakkyoclub/>

編集後記

今年度から発行月が、2、5、8、11月の各月に変更になりました。札幌くらぶコンサートの模様を伝えること、定期演奏会が7月から8月に変更になったことが理由です。今年最初の発行です。本年もよろしくお願いいたします。

4ページでお知らせしましたように、東京公演ツアーは、残念ですが今年には行わないことになりました。札幌の事務所によると、チケット

の売れ行きは例年に増して好調なようです。北海道からも熱心なファンが相当数、東京に足を運んで下さるようです。心強いことです。

札幌くらぶコンサートは、昨年チケットをほぼ完売し、当日券が30枚しかなく、大混乱となり、多くのファンにご迷惑をおかけしましたので、今年当日券の販売はしない予定です。早目のご予約を。
(佐藤良次)